

第41号 華山会報

平成30年12月1日

公益財団法人華山会

私なるものをめぐって

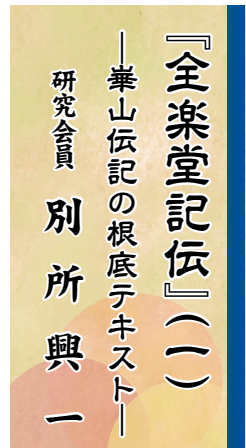
東京大学文学部教授 佐藤康宏



江戸時代の思想では、現代に通用するような〈私〉の概念が初めから認められていたわけではない。徳川幕府が正統的な学問、つまり官吏になるために学ばねばならない学問として採用したのは朱子学だったが、朱子学では公私の区別はなく、すべては〈公〉のために存在しなければならぬ。公は善であつて私は悪である。私なるものはそこでは存在することができなかつた。それに対して、荻生徂徠が説いた徂徠学は、公私が反対の概念であることを明確に述べる。そして、公は政治的、社会的なものであり、私は個人的、内面的なものと分離し、私的なものの価値を認めるのである。公の領域を律する道徳的規範と、私の領域のそれとは同じではない。それゆえ、私の領域に属する文芸、音楽、書画などは、公のための学問とは別におおいに楽しんでよいということにもなる。このような徂徠学の思潮が江戸時代中期以降の南画の発達を促した。当時の知識人たちが、彼らにとつては新興の芸術活動である南画に身を投じたとき、〈公〉ではない〈私〉の領分と名づけるべきものの発見が伴っていたのである。

華山にとって、公務である仕事と絵画制作とは疑いなく公私の関係にあつた。だが彼は政治と絵画の間だけではなく、絵画そのものの中に公と私の分裂と交流を抱えていた。絵画は何よりもまず生活の手段であり、内職として貧しい家計を助けるためのものだった。そしてやがては天下第一の画家となることを志しもしたのだった(『退役願書稿』)。これらはいずれも大義名分のための絵画制作といえるが、彼が絵画について語る書状は別の側面を見せる。現実の自分は片田舎の小藩の家老としてつまらない仕事をしているに過ぎないが、絵画の技量ならば日本はいままでもなく唐天竺にも通用するほどだという強烈な自負を記す一方で、絵画などは害にしかならぬもので自分でも飽きてしまったのだが、いまさら捨てるべく情性で手掛けているだけだと告白する。こういう矛盾に満ちた発言の一方で、華山の最もびやかな作品が、大義名分の名目を離れた地点で自分自身の娯しみとして生まれたのは、多くの人の認めるところだろう。しかし、そのようなかにも私的な絵画は、それだけで成立したのではなく、反対側に存在する公的な絵画との緊張関係の中から生み出されたと思しい。例として挙げるべきは、たとえば「一掃百態図」(田原市博物館)や「四州真景図」などである。

私なるものは必ず公なるものとの対立、葛藤を通じて形成されるのであり、そうして彼の絵画に表現された〈私〉なるものこそを最も高く評価したい。華山が近代的なのは洋風技法を用いた絵画を描いたからではなく、〈私〉を〈公〉に拮抗させたからなのだ。拙著『絵は語り始めるだろうか』(羽鳥書店、二〇一八年)にも再録した「芸妓図」(静嘉堂文庫美術館)をめぐる議論の論点はそこにあつた。



次の記事がみられる。

華山子ノ行事、見ルマ、聞クマ、ニ筆記シ置所也。草藁ニテ未ダ吟味不致候。中ニハ雑細ノ事有之候間、ヨク御選被成、又朋友門人ノ中其外誰ニテモ、行事言語等覚居候人ニ御書加へ被成、御撰定ノ上松崎慊堂先生へ御撰定御願被下度候。

村上定平様 八木八三郎様

『全楽堂記伝』は江戸期に起草された数少ない華山伝記で、その後出版された多くの華山伝記の根底テキストと言えるものである。
大正三年（一九一四）に刊行された『華山全集』第二巻所収の「渡辺家年譜」は、それまで編者も成立年代も不明だったが、実は『全楽堂記伝』の後半部が脱落した不完全本だったのである。

『全楽堂記伝』の現存する写本としては、西尾市の岩瀬文庫所蔵本（美濃本一冊、墨付百五十丁）の他に三種の写本が知られている。筆者が吉川利明氏らと共にこの四種の写本を比較検討した結果、明らかにしたことの一端を次に紹介したい。
本書『全楽堂記伝』の本文の終末部に、本書の成立事情を推定させる

本書は松岡次郎が、華山没後まもなく華山の親戚縁者や地元の古老を訪問調査するなど、自らの見聞に基づいて執筆したものであることが知られる。松岡はこの未定稿ともいべき華山伝を、華山の朋友門人などに一読してもらった上で、記述の不足を補ってもらうことを乞うている。

また、華山の師松崎慊堂に最終的な校閲を依頼してほしいと希望している。宛名の村上定平と八木八三郎は、いずれも田原藩士で、生前華山の知遇を得ていた人物である。
編者の松岡次郎（一八一四～五八）

は、岡崎藩士の家に生まれ、数え二十歳の時に田原藩士松岡与義の養嗣子となったが、妻となるべき松岡家の養女は間もなく病死してしまった。好学の徒で華山や伊藤鳳山らに師事して儒学を学び、蚕社の獄の際には華山の救援運動に奔走した。天保十一年（一八四〇）一月、華山が在所蟄居の判決を受けて田原に護送された際には、道中罪人差添人として華山に同行している。華山の蟄居中の日記『守困日歴』を見ると、次郎が池ノ原の幽居を、鈴木春山・真木定前・村上定平らと共にたびたび訪問していることが知られる。翌年十月に華山が自刃した際には、江戸の役人による検死の後、銅板に華山の名前と戒名を書いて棺の中に入れ、田原城宝寺に葬ったという。

そして弘化二年（一八四五）二月に次郎は、今は亡き恩師華山の長女可津（二十歳）を妻に迎えた。しかし次郎が年寄役に栄進して江戸勤番となった弘化四年頃には、可津は離別して渡辺家に復籍している。松岡

目次

題字「華山会報」元華山会理事 故小澤耕一氏

P ① 私なるものをめぐって 佐藤康宏

P ② 全楽堂記伝(一) 別所興一

P ② 目次

P ④ 渡辺華山『毛武游記』⑱

P ⑧ 四州真景の旅 ④

P ⑩ 少年物語渡辺華山 読書感想文

P ⑭ 会報索引

P ⑯ 公益財団法人華山会 田原市博物館 田原市渥美郷土資料館 からご案内

家の家庭事情（嫁と姑の不和）によると推定される。

他方、『全楽堂記伝』の執筆年代を推定すると、本文や附記などから、華山の自刃した天保十二年十月から松崎謙堂の逝去した弘化元年四月までの間であることがわかる。晩年の華山と親しく交わった次郎は、恩師でまもなく義父となる華山の生涯と事績をできるだけ正確に記録して、後世に伝承することを念願していたのではなからうか。

強いて難を言えば、本書には華山の画作・画論の記録、蘭学研究や幕政批判の実相が、ほとんど記述されていないことである。

次に『全楽堂記伝』に表現された華山像の特徴、これまで考察されることの少なかった華山の事績を、原文（ルビ・送り仮名や字義を補って）を引用して、いくつか紹介したい。

まず最初に文化十三年（一八一六）の条に、華山二十三歳の自戒の言として次の一文が見られる。

必（ズ）一事ヲ思ヒ立タン人、第一ニ交（リ）ヲ絶テ人ノアザケリヲモカヘリミ（顧）ズ、第二ニ他ノ事ノ破ル、共、思ヒ立ヌル方ニ心ヲヤリテ日ヲ惜ムベキナリトテ、双ノ岡ノ法師ハモヲ（申）サレタリ。（中略）

又一事ニ思（ヒ）タラン人ハ、其道ノオキテ忽ニスベカラズトテ、経書ノ課ヲ立テ読メリ。又嘗テ云ク、一里ノ山ヲ作ルニハ一月ヲ以テ期シ、十里ノ山ヲ作ルニハ十月ヲ以テ期ス。然ラバ一家ヲ治ムルハ先一身ヲ修メ、一国ヲ治ムルニハ先一家ヲオサム。天下ヲ平カニスルニハ先一国ヲオサム。

吉田兼好著『徒然草』の双ノ岡ノ法師の言を引用しながら、一事を思い立った人はわずかな時間も粗末にすることなく、その実現に向けて専心努力することの大切さを力説している。何事をするにも、現実逃避や安易な決着を排し、修身齊家治国平天下という遠大な構想、長期的な計画を持って取り組み、小成に甘んじ

ないように注意すべきである。その結果、「斯テ勉強シテ書ヲ読ミ且抄シ、画ヲ模シ且作ルコト益多カリキ」という自覚に到達できるものだと付け加えている。

文政六年（一八二三）の条には、三十一歳の華山が結婚を契機に自省のため、次のような「心の掟」を定めたことが記されている。

一、両親ヲ置シカラズ可致様心得ベキ事。

一、学問ヲシテ遠ク慮リ、画ヲカキテ急ヲ救フ事。書物ハ経書画書、此外不可見事。

一、交リ候人、佐藤一斎、本多思齋、コノ二人ハ心事ノ相談致シ、萬事不隠候事。

一、屋代輪池、北静蘆、滝沢馬琴、此三人ハ聞見ヲ広メ、書籍等借引致シ、益友ナリ。（中略）谷文晁、市河米庵、檜山担斎、立原杏所、書画ノ道ニ深キ人ナレバ常ニ益アリ。交リテ楽ムベシ。

一、常ニ交ライト多ク、家近キ人ハサラナリ。同藩ノ者ハ格別ナル事

ナリ。サレドモ交リテ己レニ益ナク彼モ益ナシ。（中略）サリトテ義理アシキ事ハナス事ナカレ。

一、行儀作法随分簡ニシテ常ニ違ハズ。日々返思可致事。飲食相節、出入動静相心得、前後寸陰ヲ惜ミ思フベシ。遠慮第一ノ事。言語不多、一々詳密ニ相弁ヘ候様可心得事。一寸書付候物モ書正敷、況テ文理相通候様ニ。（後略）

第一、二条では両親に乏しい生活をさせないことを念頭において、儒学を勉強して高遠な理想を求めるとともに、内職としての画作に精を出して、当面の生計の苦境を打開しようとして決意表明している。

第三、四条では多種多彩な師友に對し、それぞれの立場や人品を考慮して双方とも有益になるよう交際し楽しむべきことを書き留めている。

第五、六条では日常の人間関係における実地に即した注意深い対応の姿勢を説いている。

総じて華山の細やかな気配りの一面が窺われる。



天保二年（一八三二）十月二十二日続き

足利学校を訪れた華山たちは、聖廟（孔子廟）に入つて、安置してあつた聖像（孔子像）を取り出し、その胎内に書かれていた文字を読んだ。『毛武遊記』本文は、そのいきさつについての記述を後回しにして、読んだ文字を先に書いている。したがつて、この部分は読者にとっては唐突で分かりにくいところであるが、本文の順序に従つて記載することとした。

之千年外物無^レ疑^シ、年久^シ雖^モ数^タ加^フ修補^ヲ、外面無^一損壞者^ニ、肚裏有^レ文、摩撮^シ不可^レ読^ム。僅可^レ弁者^如左。

これは千年以上昔のものであることは疑いなく、長年にわたつていくつかの補修を加えているが、外面には壊れた箇所は一つもない。腹のうちに文が書かれているが、こすれていて読むことができない。わずかに読むことができたのは左のようである。

- ※ 之 聖像をさす。
- ※ 千年外 千年以上
- ※ 肚裏 腹のうち
- ※ 摩撮 摩擦。こすれる。昭和の末頃、この孔

子像が解体修理され、この胎内銘も明るみに出た。『足利学校孔子像修理報告書』（昭和六十三年三月、足利市教育委員会発行）には華山の指摘と同様に、「墨書銘は中央部分が大きく雑巾の様なもので拭き取られており、赤外線写真によつても相当部分が解読不能の状態になっている」とある。写真および「胎内背面部内刻面の墨書銘」参照。

以下十行は華山の解読文

- 1 于時侍^ス講筵^ニ、学徒八百餘人下^ラ摩滅^{不^レ審^ム}
- 2 于時能化江左人日新^ス摩滅
- 3 此間五行不可^レ読^ム
- 4 執権長尾但馬守憲長不^レ審^ム
- 5 天文三年正月庚申之日初刻^レ之^ヲ、^{同殿}
- 6 四稔秋八月上下之忌畢矣。
- 7 於^ニ椽下小路山^ニ。
- 8 同其妻之妙法、以^テ漆桶一ケ^ヲ、合力
- 9 潤^ニ色^ス之^ヲ。一行 紫陽之一木。僧以^テ四百字
- 10 孔方^ヲ為^ニ硯水^ト也。一行

- 1 その当時、講義の席に着く学徒は八百人余りいた。
- 2 その当時、座主（校長）は江左の人日新文伯、
- 3 この間五行、読むことができない、
- 4 領主長尾但馬守憲長、
- 5 天文三年正月庚申の日に初めてこの像を刻み、



聖像（孔子像）



胎内墨書銘（写真）

- 6 同四年秋八月の上丁の忌に作り終えた。 ※ 1 行頭の数字は、訳者がつけた行番号。こ
- 7 桜下小路山において。 ※ 2 このは、原文通り改行して行番号をつけた。なお、
- 8 同じくその妻の妙法は、漆を桶一個分寄付し、行番号1の前に、華山の読めなかった行が二
- 9 この像に塗った。ここまで一行。紫陽の一本。行ある。
- 10 僧は四百字の謝礼をもって、 ※ 3 講筵 講義の席。
- 11 (僧は四百字の謝礼をもって) 飲食費とした。 ※ 4 下摩減不審 各行の下の小さい字は華山の注
- 12 (ここまで一行) 書きであり、胎内銘文にはない。

〔胎内背面部内刻面の墨書銘〕

六部幸憲江州住呂 道薫
 為母妙林 □ □ 為母妙心 為母妙寿 為母妙永 為母妙性 為道高 □母 (カ) □□□
 于時侍講筵学徒八百余人 弟子 妻女 為妙珍道正
 南瞻部州天日本 (異筆) 都良香
 館開 (異筆) 元慶元丁 酉冬至
 中華人権大僧都
 之彩之同家弟之権律師
 于時能化江左人日新宋 (カ)
 執権長尾但馬守憲長也
 上献三宝
 天文三年正月庚申之日初刻之明四稔秋八月上丁忌畢矣
 於桜下小路山田屋
 同其妻之妙法以漆桶一ヶ合カ潤色之
 紫陽之一不僧以四百字之礼方為硯水也 (カ)
 五十文せ千ト云下女硯水ス汲水沙清 次郎太妙菊為二親せ千子女
 百文 大山弥三郎戒名光心同其妻ニク女 為逆修妙泉

- ※ 能化 足利学校においては「庠主」(校長)の
- 意味で使われる(後述する大澤慶子氏論文に
- よる)。
- ※ 日新 当時は近江出身の六代庠主日新文伯の
- 時代なので、日新文伯のことか。
- ※ 此間五行 二行目と三行目は入れ替えるべき
- である。すなわち、華山たちが読めなかつた
- のは行番号1と2の間である。それは「修理
- 報告書」では四行であるが、南で始まる行の
- 前に一行分の空白があるので、華山が書いた
- とおり五行だったのかもしれない。そして、
- 行番号2の次の行は4である。
- ※ 執権 ここでは、幕府の職制上の「執権」で
- はなく、当時足利を支配していたという意味
- で使っている。
- ※ 長尾但馬守憲長 第16回(39号)参照。
- 行番号4と5の間に二行ある。
- ※ 天文三年 一五三四年。
- ※ 四稔秋… 六行目は、胎内銘では五行目の
- 下に続いている。
- ※ 四稔 四年。
- ※ 上下 上丁の読み違い。孔子をまつる陰暦二
- 月と八月の最初の丁の日。その下の「之」は
- ない。
- ※ 畢 終わる。像が出来上がった。
- ※ 桜下小路山 足利内の地名。像を制作した場
- 所か。
- ※ 漆桶一ヶ 漆を桶一個分。
- ※ 合力 施し、喜捨すること。寄付すること。
- ※ 金品を恵むこと。

※ 潤色 事柄をつくろい飾ること。ここでは像に漆を塗ったこと。

※ 一行 九行目の「二行」は、前行の「同其妻」から「潤色之」までが本来は一行ということ。「潤色之」の下にも文字が書かれていたが消されたと思われる。次の行の「一行」は、「紫陽之」から「硯水也」までが本来は一行ということ。

※ 紫陽 前の行（消された文字）から続いた分の一部と思われる。下の語が「一木」ならば「紫陽」はアジサイの意でいいか。

※ 一木 「修理報告書」は「一不」と読んで、「一不僧」と続ける。

※ 孔方 穴あき銭の異名。「修理報告書」は「礼方」と読んでいる。華山はその上の「之」を落としている

※ 硯水 「ケンスイ」と読めば硯（すずり）の水。「ケンズイ」と読めば間食、酒など。

※ 大澤慶子氏が「足利学校孔子坐像考」（史跡足利学校研究紀要『学校』第二号、平成十四年三月）において、紫陽を筑紫の意とし、「一不僧……孔方」と読み、「筑紫出身の僧が四百字の銭をもって工人の酒代食事代などの料金を出資した」と解釈したことに教えられた。ただ、「不僧」を「僧」としたことに疑問が残る、「四百字の銭」は四百字書いた謝礼なのか「字」が銭を数える単位なのか不明。
後に二行あるが、見えなかった。

※ 華山の読み取り

涌田佑氏は、華山が書き写したものと調査報告書を対比させて逐条に考察したあとに、「それにしても、短時間の、しかもあの悪条件下で、華山の向学心というか、好奇心というか、対象に執着する態度は見事としかいいようがない」とし、岡田東鳩ら同行の者たちが読み取りを華山一人に任せたことを指摘し、「その碩学ぶりは並みいる人々の比ではなかったことがよくわかる」と評価している（『平成校注「毛武遊記」』）。

右の数十字隠々可読。何等漢磨其字、書曰。慶元丁酉、月八日、都良香。可惡。

右の数十字はかすかではつきりしないが読むことができる。何者かが元の字を拭き取って、（新たに）字を書いて言うには「（元）慶元丁酉、月八日、都良香」と。これは憎むべきことである。

※ 隠々 かすかではつきりしないさま。

※ 何等漢磨其字、書曰 足利市の『修理報告書』

にも、元の文字が拭き取られて解読不能と書いたあとに「……都良香 元慶元丁酉冬至」の墨書銘は、その拭き取られた上に後世書き加えられたものであり、当初の墨書との関連は認められない」と書かれている。

※ 何等漢 いずれかの男。何者か。

※ 慶元丁酉、月八日、都良香 何者かによって後で書かれた文字。但し、「月八日」は「冬至」

の読み間違い。

※ 慶元 「元慶元」とあったのを、上の「元」を

書き落した。元慶元年（八七七）。

※ 都良香 八三四―八七九。平安時代前期の漢学者。孔子像との関連はなく、ここに登場するのは唐突。足利学校を小野篁が開いたという伝があり、何者かが小野篁と間違えて「都良香」と書いたか。

※ 可惡 誰かが元の文字を拭き取って別の文字を書いたことを、華山が非難している。

※ この段落の理解について

『毛武遊記』の中で最も理解に苦しむ所と言われていた部分である。特に都良香の名は唐突である。しかし、理解できなかったのは、後世の人が元の文字を拭き取って別の文字を書いたということがにわかには信じられなかったためだろう。『修理報告書』と同じことを華山は指摘していたのだ。

なお、涌田佑氏は「都良香 元慶元丁酉 冬至」の文字を華山が解読文の所に書かなかつたことをかなり重要なミスと指摘し、段落の最後の意味を「（何も関係ないのに唐突に名が出てきて）都良香は困惑しているだろう」とした（『平成校注「毛武遊記」』）が、華山は後世の人による異筆と分かつたから解読文の所には書かないで後に書き、後世の人のそのような行為を憎むべきと指摘したのだろう。文字の書き間違いもあったが、華山の解読と指摘は赤外線カメラによるものとはほぼ同じで、驚くべきすばらしさだった。

相伝、足利学校、淳和天皇、天長九年八月五

日、大内記参議小野篁奉旨所創、先師像、華物云。小野参議子孫世々居之。後至文明之間、積快元唱、儒釈同一之学、導学徒居之、後終為僧窟。相伝、七世有玉岡者、学徒三千、学校創肋已来、莫盛焉云。玉岡室、後有松、呼曰字降松。相伝、其徒受教、松下、故名。按、学校、小野参議所創云々、可疑。日本紀無所見。

代々伝え継がれたところによれば、足利学校は、淳和天皇の天長九年（八三二）八月五日、大内記参議小野篁が旨を奉じて創始し、先師像は中国で作られた物という。小野参議の子孫が代々ここにいたが、後に文明年間に至るまでに、積快元が儒教仏教同一説を唱えて学徒を導き、ここにおり、後にはついに僧が集まる所となった。代々伝えて七世玉岡という者がいた。学徒は三千人、学校が創始されて以来最も盛んになったという。玉岡の部屋の後ろに松があり、字降松と呼んでいる。代々の言い伝えでは、学徒は教えを松の下で受けたので、そう名付けたという（足利学校の伝承と違う。注を参照）。私が考えるに、学校が小野参議の創始云々は疑うべきである。『日本紀』（『日本後紀』）に書かれていない。

- ※ 相伝 代々伝え継ぐこと。
- ※ 淳和天皇 在位八二二—八三二。桓武天皇の第三皇子。



現代の字降松

- ※ 天長九年 八三二年。
- ※ 大内記 令制における中務省の職。太政官の外記に対するもの。二人あって、詔勅・宣命をつくり、位記を書く職であるから、儒者で文章の上手な者を選任した。
- ※ 参議 令外官。朝政を参議する意からこの職名が起こり、大臣・納言に次ぐ重職。大宝令施行後まもなく設置され、弘仁年間（八一〇—八二二）以後、定員八名となった。
- ※ 小野篁 八〇二—八五二。平安時代初期学者・漢詩人・歌人。参議。従三位。『令義解』選進に参加。
- ※ 華物 中国で作られた物。孔子像は中国で作られたと伝承されていたが、胎内銘から戦国時代に日本で作られたことが分かる。
- ※ 文明 元号（二四六—八七七年）。
- ※ 積快元 鎌倉円覚寺の僧だったが、上杉憲実に招かれて足利学校の初代座主（校長）となる。儒学や易に詳しかった。生没年不詳だが、文明元年（一四六九）没の説がある。
- ※ 儒釈同一之学 儒仏同一説。儒教と仏教の説くところは同じだという学説。
- ※ 僧窟 僧侶が集まる所か。
- ※ 玉岡 一五〇〇—七八。天文十九年（一五五〇）から足利学校の第七代座主となり、没するまで在職。その頃、足利学校で占筮（占い）の学が本格的になり、「足利学校易伝授書」に座主の名が出るのは、玉岡瑞璵が最初という。
- ※ 莫盛 非常に盛ん。
- ※ 字降松 かなふりまつ。
- ※ 足利学校の伝承は、華山が書いている内容とは違い、読み方の分からない漢字を書いてその松にするしておく、翌日には仮名がふつてあるという内容である。
- ※ 日本紀 普通は『日本書紀』を指すが、六国史全体を指している場合もあった。淳和天皇の時代が書かれているのは、そのうちの『日本後紀』。

（続）

『四州真景の旅』④

旅先で訪ねた人物 大里庄治郎（続編）

研究会員 中神昌秀

一 序

華山は、文政八年（一八二五）夏、利根川下流域を旅し『四州真景図』（重要文化財、個人蔵）を制作します。その旅の中で訪ねた人物、下総国海上郡荒野村（現千葉県銚子市）の富豪 大里庄治郎については、華山会報第三九号で書きました。しかし、読み返すと、大里の家業である御穀宿や俳句の師恒丸の記述等が多く、華山とのかかわりが不十分のような気がします。そこで、続編として、華山が大里邸になぜ滞在したのかを訪ねる旅をしてみたいと思います。

二 大里邸滞在時期

銚子の大里邸滞在時期は、いつだったのでしょうか。華山は旅立つ日について「文政八年乙酉歳六月廿九日曇、卯刻出宅。」と書いています。パソコンの旧暦新暦変換を利用して計算すると、旧暦文政八年六月二十九日は、新暦八月一三日になります。この日が江戸出発の日です。現代のお盆の時期で、暑い日が続いていたのではないのでしょうか。そして、『四州真景図』によれば、初日は白井宿に泊まり、二日目は津宮の佐原屋、

三日目は潮来のいつみや泉助に宿泊しています。銚子まで旅を続け、大里庄治郎邸にしばらく滞在することになります。銚子到着の日は、明確ではありませんが、潮来から銚子へは利根川を下り、一日あれば十分なので、新暦八月一六日には銚子へ到着したはずで。

華山が大里邸を出て江戸へ戻る日については、利根川に船を浮かべて華山一行を歓迎した話である『刀祢游记』にヒントがあります。刀祢游记の冒頭に、「盆の月いつかいでくる、もしらぬ膝の上に松かげさしのほれば」という文章があります。この「盆の月」というのは旧暦七月五日を指しています。そして、旧暦新暦変換計算によると、旧暦七月一五日は新暦八月二八日になります。この日の歓待は、同時に別れを惜しむ宴でもあったのではないのでしょうか。華山は、翌日ないし、数日後には銚子の大里邸を後にしたと推測されます。

三 大里庄治郎と華山の関係

華山がなぜ利根川下流域を旅したのかは、『旅の目的』として別に書く予定ですが、華山はなぜ銚子で大里邸に二週間余りも滞在したのでしょうか。その前段階の話として、華山と大里の交流はどうして始まったのでしょうか。

大里庄治郎は『華山書簡集』（小澤耕一編著）の中に二回登場します。天保六年（一八三五）十月七日付塚三苑（門田の栄）製本の件）書簡には、

「門田の栄、製本いつ頃出来候哉。可相成ハ早き方上々御座候。版木取ニ上候。一、桂丸先生今日御来駕籠やと存候処、御案内なきま、明日歟と存候。其節ハ先生御世話御同伴祈申候。」と書かれています。華山が製本屋へ大里の世話を依頼していることから、二人は製本屋の上客として、天保六年以前から、ここで何度も顔を合わせていることがわかります。

もう一つは、月日不明の小林経蔵宛書簡です。「此間、行方屋御同伴添奉謝候。表紙外題のケイ、御スリ置御座候ハ、十二・三枚頂戴奉願候。頓首 登 小林経蔵様」と書かれています。この二通の書簡は直接大里に宛てたものではありませんが、これらの書簡から華山と大里の間には親密な関係があったことが判ります。

そのような関係が、どうして生まれたのでしょうか。華山と大里の接点を探ると、真つ先に俳句が挙げられます。華山は俳諧宗匠の第六世太白堂孤月（一七八九〜一八七二）と深い交流がありました。初世太白堂の天野桃隣（一六四九〜一七一九）は、松尾芭蕉（一六四四〜一六九四）の類縁とも言われています。孤月は、この六代目を継ぎ明治の初めまで活躍しました。華山は孤月が主宰する俳誌『桃家春帖』に二十年あまり挿絵を描いています。天保八年（一八三七）の『桃家春帖』には「太白堂之主人従桃隣子至孤月君凡六世其門戸之盛莫於君矣。而予画此帖者已二十有餘年前後亦無聞。然則桃也華

也所以煥赤干世也。華山拜史。」と書かれています。また、華山は俳人の小林蓮堂と親しく、四州真景の旅の同行者になっています。

江戸在の華山と、商用や句集の出版でしばしば江戸に来ていた俳人でもある大里は、江戸において俳句が取り持つ縁で出会い、交流が深まっていたとするのが自然ではないでしょうか。



『桃家春帖』 天保七年 田原市博物館蔵

さらに、もう一つは華山の師である谷文晁（一七六三〜一八四一）を介した関係が挙げられます。『寓画堂日記』によると、文化一二年（一八一五）には文晁の写山楼に上がり盛んに模写すると書かれていますので、華山は、この頃には、文晁の弟子になっていました。

それから六年後、大里は文政四年（一八二一）

には俳人今泉恒丸（一七五一〜一八一〇）の妻素月の三回忌追善集である『俳諧蚤のあと』を編集しますが、その中の素月尼座像の挿絵は谷文晁作です。大里の依頼は、華山を介してか、他に仲介者がいたのかは判然としませんが、これにより文晁の弟子である華山との関係も深まったことは間違いありません。

そして、四州真景の旅は文政八年ですので、この編集から四年後になります。大里が挿絵を依頼した文晁からか、華山との直接の関係からかはともかくとして、銚子に行くなら大里邸という話になったのでしょうか。

四 御穀宿経営と大里邸滞在

大里家は磐城平藩安藤家と棚倉藩井上家の廻米を取扱う御穀宿になっていました。御穀宿での払米（年貢米の売払）は、秋に行われていました。その際には、銚子へ出張した藩の役人と協議して御穀宿から仲買人に通知し、入札により売却していました。

払米の詳細な制度は不明ですが、御穀宿には払米のため武士が滞在する臨時の役宅的機能があったのではないのでしょうか。大里邸もそのような機能完備しており、華山一行は入札のない時期にこれを利用して滞在したと推測されます。

また、御穀宿経営により十分な財力もあり、華山滞在による経済的負担も苦にならなかったはずですが。

五 小林一茶の大里訪問に次ぐ華山滞在

江戸時代を代表する俳人 小林一茶（一七一六〜一八二八）の句日記『七番日記』には、旧暦文化一四年（一八一七）五月二十七日から六月一日までの四日間、銚子の大里邸に滞在した様子などが書かれています。

この一茶の滞在の八年後に、江戸で既に名声を博していた華山も、一茶に続いて大里邸に滞在しています。大里が華山の滞在接受入れたのは、先行してあった一茶の滞在接受が大きく影響しているのではないのでしょうか。

また、大里には恒丸の高弟として、地方文化人の自負のようなものもあつたはずですが、それも、一茶そして華山の滞在接受入れた理由の一つのように思えます。

六 終わりに

今回は前回書き足りなかった大里と華山について、不十分ですが、補足をしました。それはまた。

参考文献

太白堂孤月研究 江戸時代後期の俳諧宗匠
松尾真知子著 二〇〇九年

※連載中に、一度紹介した参考文献は紹介を省略しています。

「少年物語 渡辺華山」

読書感想文について

公益財団法人

華山会では、郷土の偉人渡辺華山先生の功績を後世に伝承する事業の一環として、毎年市内小学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子をプレゼントしてまいりました。感想文の募集を行ったところ、二四七件の応募をいただきました。



この中から優秀賞五点と嚶鳴協議会賞一点の作品をご紹介させていただきます。

応募いただきました各学校の皆さんやご協力をいただきました各学校の先生方に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人華山会事務局

渡辺華山先生の教え

田原中部小学校 六年 小久保 和奏

わたしの通う田原中部小学校の校門の近くには、渡辺華山先生の銅像と華山先生が読んだ、「みよや春 大地も亨す 地虫さへ」

という俳句のひが建っています。この俳句は、「今に見ている、小さな虫だつて、春になれば固い地面を破って地上に出てくる」という意味です。わたしはこの句には、華山先生の強い心があらわれていると思いました。どんなに貧しい環境に置かれても、努力をすれば、世の中が変わっていくと教えてくれる言葉だと思います。

華山先生は、寛政五年、貧しい家の八人兄弟の長男として生まれました。また、お父さんの体が弱かったこともあり、小さいころから大変苦労をして育ちました。しかし、弱音や文句も言わず、家のために毎日一生けん命働いて、自分のかいた絵を売り、家計の手助けもしていました。今の世の中では、想像もつかないことです。いくら貧しいからといって自分のしたい事もできず、家族のために働くなんてわたしにはできません。それには、お父さんやお母さんが貧しくても一番に子どものことを大事にして育ててくれた親のすがたを近くで見ているからだと思います。だから、華山先生は大きくなって、その恩を家族や周りの人にしてあげたいという思いがいつそう強くなったのだと思います。

また、華山先生は、正直者で情け深い方でした。村人たちからのお礼のお金も、

「村のためにつかってください。」と受け取らなかつたり、村人のために頭を下げたりと、そんなすがたに村人からの信頼もあつかったと

思います。

そして、行動力と発案力のある華山先生のおかげで、天保の大きな時、作物がめちゃくちゃになり、うえ死にする人があちらこちらにいる中、田原藩はききんに備えて穀物を備える「報民倉」を築き、田原藩から一人の死者も出さずに乗り切ることができました。

華山先生は、自分のことより家族や田原藩のことを一番に考え行動し、人々の暮らしを守つたすばらしい人だつたと思いました。

わたしも大きくなつたら、華山先生のように困っている人がいたら、やさしく声をかけ、手をさしのべてあげられるような人になりたいです。そして、弱い人の立場にたつて相手の気持ちを思いやり、行動できる大人になりたいです。そのためにいろいろな人とふれあい、信頼関係を築きたいです。

これからいろいろな経験をして、いろいろな思いをすることがあつても、華山先生のように努力し、難しいことやつらいことがあつても、あきらめない強い心をもつて、大きな一歩をふみだしていきたいです。

そして、華山先生の功績をたくさんの人たちに知ってもらい、華山先生の思いがこれからもずっと受けつがれていくことを願っています。

華山先生の強さと人を思うやさしさ

田原中部小学校 六年 山田 りえ

私たちの学校では、毎年、学芸会で二つの華山劇を上演します。「板橋の別れ」と「立志」です。私たちはこの二つの劇により、ずっと華山先生に親

しんできました。私は高学年になり、華山先生について勉強したり、この本を読んだりするうちに、強く感じるようになりました。

一つ目は、華山先生の強さです。華山先生は、寛政五年、江戸で生まれました。暮らしはとても貧しく、八人兄弟の長男として、苦勞して育ちました。お父さんは、田原藩の殿様の家来でしたが、病気がちでした。華山先生がお屋敷勤めをするようになってからも家は相変わらず貧しく、その日のお金にも困るような暮らしました。そんなある日、日本橋のそばで、備前岡山藩の行列にぶつかってしまいました。そこで華山先生は、若君様と自分との境遇の差を思い知り、人の上に立つような立派な学者になる決意をしました。私は、境遇の差に打ちのめされることなく、前に進もうとする先生の強さに心を動かされました。

そんな中、暮らしはさらに苦しくなります。着物や家財道具を売り払っても生活していけず、弟や妹を奉公に出します。悲しい生き別れです。私は家族との別れを想像するだけで、悲しくて悲しくて、何もする気になれません。華山先生は、つらい別れにもくじけず、耐えしのぶことによって、強い心を育てたのだと思います。

二つ目は、先生の人を思うやさしさです。天保のころ、米がとれず、日本中がききんとなりました。心を傷めた先生は、報民倉をつくり、田原藩の人々を守ります。人々のために自分で描いた絵を売り、米十俵を一番に寄附したそうです。また、先生ののもとに魚屋が続けられなくなり、妻と子供も養えないという人が来ると、先生は魚屋を続けるお金を用意しました。そして、お礼として持ってきた魚も断つたそうです。私は、先生の清らかな人を思いやる心の深さに感心しました。

また、先生の人を思うやさしさは、残された書物にも表れています。先生が無実の罪で蚕社の獄にとらわれたとき、「あさなわに かかるうき身は かずならず 親のなげきを とくよしもがな」と書きました。自分は麻なわでしばらく牢屋に入れられたけれども、そんなことは何でもないことだ。しかし、このためにお母さんがどんなになげき悲しむだろうという意味です。自分のことよりも母のことを思いやる先生の心のやさしさが強く伝わってきました。

先生は、最期、自刃するとき、殿様に迷惑がからないようにと考えていました。最期の書には、大きく「不忠不孝 渡邊登」小さく「罪人石碑相成サルヘシ 因テ自書」と書かれていました。自分より人を優先し、最後まで人のために働き続けた華山先生。先生の思いを知った今、私は、苦しいときもあきらめることなく、人を思いやりながら強く生きていきたいです。

渡辺華山の生き方に学ぶ

伊良湖岬小学校 六年 小久保 瑞歩

私は、『少年物語「渡辺華山」』を読み、華山の生き方を知った。そして、不思議に思った。自分をぎせいにしてまで、なぜ人のことを考えることができるのだろうか、と。

華山は子どものころ、男の子なのにとってもおとなしく、注意深い子だったようだ。そんな華山が、殿様の行列にぶつかってしまったことがあった。華山は、周りの人にめいわくがかかっていることを考え、父親や藩の殿様の名前を言わず、自分だけがぎせいとなった。このできごとから、「自分より人」という

華山の優しさと度胸のよさが伝わってきた。

また、華山は、くらしを立てるために絵を習い始めた。それは、先を見通しての行動で、よく考えているなと感じた。貧しい生活の中でも親孝行を決して忘れることはなく、強く生きようとしている姿はすごいと思った。華山は、優しさ人間としての強さ、両方をもっている人だったのだろう。

華山は、家族だけでなく、たくさんの人々も助けた。自分がどんなに辛い時でも、相手のことを思いやり、行動した。「自分」のことより「人」のことを先に考えた。「人のためにつくすことができぬ人になりたい」と思っても、それを最後までつらぬき通すことは難しいことだ。それができる華山は、本当に心が強いのだと思う。

私も、友達や家族など周りにいる人に優しくなりたいと思うが、自分の思いや考えの方が優先してしまうことがある。それでも、幼いころよりは自分で気をつけることが少しずつできるようになってきたと思う。母も、

「瑞歩は、周りの人の気持ちを考えてあげることができるようになったね。」

「お母さんにいつも元気をくれて、ありがとね。」
と言う。そんな言葉を聞くと、何だかうれしい気持ちになり、人を思いやる心を忘れずにいようと思ふ。

食べ物がなく、たくさんの人が苦しんだ天保のききんの時の「凶荒心得書」には、「百姓があるからこそ殿様があるので、殿様があるから百姓があるのではありません。百姓は国のもつであり、百姓があるからこそ殿様も何不自由なく、ぜいたくをなさることができるのであります。」と書いてある。華山は殿様が一番という時代に、進んだ考えの持ち主だったのだ。身分で分けへだてするのではなく、

どんなに貧しい人たちにも平等に優しく接することのできる人だった。今の時代なら当たり前のことだけれど、華山の生きた時代には、勇気がいったことだろう。人間として本当の心の強さがなくてはできないことだと思う。

亡くなつてからも、多くの人が華山の死を悲しんだり、墓石が建てられるように幕府に願ひ出たりしたのは、華山のすばらしい人がらや、これまでの生き様の表れだと思う。

私も、華山のようにすべての人に平等に接し、周りにいる人のことを思いやつて行動できる、本当の強さをもった優しい人間になりたい。そして、「渡辺華山」というすばらしい人物が、自分が生まれ育っている田原にいたことをほこりに思う。

ぼくごじかるいふ

清田小学校 六年 柳 原 遥 斗

ぼくは昨年、習字教室から「華山会学童書道展」に作品を出品しました。言われるままに出品したけれど、これが華山先生に関係するものだという事に、この本を読んで気付き、華山先生に興味を覚えました。

ぼくの第一感想は、華山先生はすごい人だなという事です。理由は三つあります。

一つ目は、だれにでも優しく、とても情け深い人だということです。華山先生自身も、決してゆう福な生活を送っていたわけではありません。しかし、貧しい村の人からのお礼のお金は絶対に受け取らないし、どうしてもと渡されたお金は、村のため使つてと返金したそうです。華山先生は、お金や見返りを期待して動いていません。自分の使命、や

るべきことだと思つて、困っている人に手を差し伸べています。ぼくも六年生になり、自分のことだけでなく、下級生のことも考えて行動することが増えてきました。華山先生のように、優しく思いやりの心をもつて下級生に接したり、困っている子がいたら助けてあげたりできる上級生になりたいです。

二つ目は、貧しい家庭で大変苦労して育つたのに、くじけず勉強にはげんで立派な人になつたということです。十二才の時にとの様行列におつかつて武士達になぐられたのを機に、「自分もいつかあのおかごに乗つていた若君のようになりたい」と思つたそうです。ぼくももうすぐ十二才です。まだはつきりした夢はありません。華山先生のように、えらい人になりたいという想いはないけれど、勉強はがんばろうと思います。そうすれば、家老になつた華山先生のように、夢をかなえられると思うからです。

三つ目は、自分の知識と芸術的才能を使つて、色々なところで活やくしたことです。特に、田原藩で一番借金をしていた人に、自分のかいた絵をわたして借金をなくした事にはおどろきました。と同時に、才能を人の役に立つように使える華山先生をうらやましく感じました。最近ぼくは、テニスをがんばっています。イランの小学校の体育で三年間テニスをやったことと、兄が中学でテニス部に入つたことがきっかけです。練習をしていると、「上手になつたね」と、お父さんがほめてくれます。才能があるか分からないけれど、華山先生のようにやり続けることは大切だと思います。これからも、こつこつと練習して、来年はテニス部に入つて、もっと強くなりたいです。

華山先生は、最後は無念の死をとげました。ぼくは、やってもいない無実の罪で牢に入れられたの

が、とても悲しかったです。もつと生きていてほしかったです。そしたら、華山先生は日本の将来の役に立つことをたくさんしてくれたと思います。お父さんも、「人の役に立つことをしなさい。常に人の役に立っているか考えなさい。」とよく言います。いつか人の役に立てるように、ぼくは、今できるテニスと勉強をがんばります。

「少年物語 渡辺華山」を読んで

伊良湖岬小学校 六年 中 村 颯 太

この本をもらったとき、「渡辺華山」という名前を知つていたけれど、どういう人物なのかは知らなかったのも、とても興味をもちました。

この本を読んで、ぼくは、華山の周りの人への思いやりがとてもすごいと思いました。なぜ周りの人にそこまで優しくできるのかなと考えてみました。

華山の生まれた家はとても貧しく、その日のくらしにも困るくらいでした。大人になるまで変わらず、貧しいくらしをしていた華山だからこそ、他の貧しい人々の気持ちがあつて優しくできたのだと思います。ぼくには、華山のように人のために自分が損をしたり、危なくなつたりするような行動は絶対にできません。自分のことより他の人のことを優先して考えることはとても勇気がいることです。それができる華山は、本当にすごい人です。

また、華山は自分の行動に対してお礼をもらわないというところもびっくりしました。田原に新しい田んぼを作るために、海をうめる仕事が進んでいましたが、海で仕事をする人たちは、魚や海そう、塩を取ることができず、とても困っていました。し

かし、役人には逆らうことができません。そこで、華山が幕府に願ひ出て、田んぼを作るのは取りやめになりました。村の人々は喜んで、華山にお金を送り返してききました。けれど華山は、手紙といっしょにお金を返してききました。ぼくは、なぜ自分も貧ぼう

なのにお金を返してしまうのだろうと思いました。ぼくだったら、自分のくらしのためにきつと受け取ると思います。周りの困っている人のために行動することは、華山にとっては当たり前のことだったのだと考えました。

そして、いちばんおどろいたのは、華山が自害をしてしまったことです。自害の理由は、「殿様にめいわくがかからないようにするため」と書いてありました。人にめいわくがかからないように、自分の命をなくしてしまうなんてとても考えられないことです。最後の時まで、人のことを思いやる温かい心をもっていたんだと思います。華山が亡くなった後には、墓石を建ててもらえるように、親せきや弟子たちが幕府に願ひ出しました。華山は、本当に多くの人に尊敬され、愛されていたのだと改めて分かりました。

この本を読んで、小さいときから周りの人を思いやる心もち、えらくなつてもいばつたり人を見下したりすることはなく、昔と変わらずに優しく接する華山の姿にとても感動しました。亡くなるまでに、本当にたくさんの人を助けてきたことが分かりました。ぼくには、華山のように人に積極的に優しくすることができません。けれど、人を思いやる心もち、みんなにしたわられる人になれるように、周りの人のことを考えて行動することを、少しずつでも努力していこうと思います。

渡辺華山先生が残してくれたこと

田原中部小学校 六年 杉山美先

華山先生は寛政五年の秋、江戸で生まれました。友だちから離れて一人で好きな絵を地面にかきなから、おとなしく遊んでいたそうです。小さい頃から絵は好きだったのだと思います。華山先生の家には、七人の弟や妹、病気のお父さん、お母さん、年とったおばあさんがいました。貧しい家庭だったので、一生会う事が出来ない悲しい生き別れと知りながら、弟と妹を奉公に出しました。

なんぎな事、悲しい事にあうごとに、ふるい立つて必ず立派な人になろうと志を立てました。幼い頃から長男として、弟や妹のお世話をしながらおつとめにはげみ、絵を習い家族の幸せを考えがなばつていたなんて心が強い人だなと思いました。

私は学芸会の華山劇「立志」で先生の妹役「もと」を演じました。間近で先生の幼少時代を感じて、家族思いの優しい兄、そして、貧しくても必死に生活しながら学ぶ努力家だというのがすごく分かりました。

米がとれないので何とかして米をためて、日頃使う穀物を少しずつでも積み立てておこうと考え、報民倉という人民のための倉をたてました。華山先生は真剣にかいた絵を売って米十俵を報民倉へ穀物第一号として寄附しました。

先生は、人とは違う考え方や行動力が本当にすごいと思います。上下関係がある時代に、自分のためではなく人のために役立とうとする強い心が人々の幸せを大切にしていたからだと思います。私は自分の思った事をすぐ口に出してしまい、周りの

気持ちを考えず行動してしまう事があります。近くの人々が落とす物をしてもはずかしくて教える事ができません。勇気を持って人に話しかけたり、人の事も考えて行動出来るように努力したいです。

華山先生は、四九歳という若さで自ら命をたちました。無実の罪でろうに入られ、先生をよく思っていない人達によって、いろいろなうわさや悪口が世間に広まっていき、殿様や家族にめいわくをかけているように見え、決意したことでした。私は、華山先生が命をたつて家族はすごく悲しかったと思います。

その後、先生の書きおきがありました。弟子や家族への手紙、墓石の代わりに「不忠不孝渡辺登」と大きく書き残していました。最後まで人々の幸せを考え、強い志で行動していた事、今も私たちのまち、田原に残されています。

私の将来の夢は、人の命を救う仕事につく事です。例えば医者のような仕事です。華山先生みたいに何事にも精一杯努力して、人の事を考えられる優しい気持ちを持たないようにします。

そして、この伝統ある田原中部小学校で生活した六年間と、田原に受けつがれている「田原藩の家老渡辺華山先生」について学んだ事をほこりに思い、これからも楽しく元気に過ごしていきたいです。



華山会報索引

本索引は第三十一号より第四十号に掲載された内容を収録しました。

◆巻頭言◆

- 第三十一号 渡辺華山先生の顕彰：鈴木愿 一頁
- 第三十二号 渡辺華山と江川坦庵：工藤雄一郎 一頁
- 第三十三号 田原市民の拠りどころとして：村田眞宏 一頁
- 第三十四号 「蚕社の獄」第三の男、小関三英：岩下哲典 一頁
- 第三十五号 思えば思われる：山下政良 一頁
- 第三十六号 「田原藩日記」にみる駆込寺：佐藤孝之一頁
- 第三十七号 松浦武四郎と渡辺小華―幕末・維新の交流
：山本命 一頁
- 第三十八号 田原市博物館名誉館長にドナルド・キーン先生 一頁
- 第三十九号 田原藩と幕府奏者番：大友一雄 一頁
- 第四十号 『毛武游記図巻』における「観音山から見た足利の町図」：大澤伸啓 一頁

◆地元の声◆

- 第三十一号 華山、虎二郎、そして山本雄二郎：嶋津隆文 二頁
- 第三十二号 身近なふるさと学習への対応：渡邊峰男 二頁
- 第三十三号 渡辺華山先生の歩いた道：金田信芳 二頁
- 第三十四号 つながりのある学び：横田威 二頁
- 第三十五号 新たな風に乗って：花井隆 二頁

◆画家渡辺華山の心象◆

- 第三十一号 風竹図：鈴木利昌 三頁
- 第三十二号 蠶螂図扇面：鈴木利昌 三頁
- 第三十四号 雪山高隠図（田原市博物館蔵）：鈴木利昌 三頁
- 第三十五号 十二支図巻（田原市博物館蔵）：鈴木利昌 三頁

◆特集記事◆

- 第三十一号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 八頁
- 第三十三号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 十四頁

- 第三十五号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 十頁

- 第三十七号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 十頁

- 第三十九号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 十頁

◆博物館所蔵品から◆

- 第三十二号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑨ 八頁
- 第三十三号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑩ 八頁
- 第三十四号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑪ 八頁
- 第三十七号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑫ 八頁
- 第四十号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑬ 八頁

◆資料紹介◆

- 第三十一号 渡辺華山『毛武游記』⑧：加藤克己 四頁
- 第三十二号 渡辺華山『毛武游記』⑨：加藤克己 四頁
- 第三十三号 渡辺華山『毛武游記』⑩：加藤克己 四頁
- 第三十四号 渡辺華山『毛武游記』⑪：加藤克己 四頁
- 第三十五号 渡辺華山『毛武游記』⑫：加藤克己 六頁
- 第三十六号 渡辺華山『毛武游記』⑬：加藤克己 四頁
- 第三十七号 渡辺華山『毛武游記』⑭：加藤克己 四頁

◆会員から◆

- 第三十八号 渡辺華山『毛武遊記』⑮…柴藤克己 四頁
- 第三十九号 渡辺華山『毛武遊記』⑯…加藤克己 二頁
- 第四十号 渡辺華山『毛武遊記』⑰…加藤克己 四頁
- 第三十一号 華山の田原行(十五)…柴田雅芳 十二頁
- 第三十二号 平成二十五年華山・史学研究会研修視察
毛武桐生の華山の足跡をたどる…鈴木利昌 十二頁
- 第三十三号 華山の田原行(十六)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十四号 平成二十六年華山・史学研究会研修視察
明石城・姫路城を訪ねる…鈴木利昌 十一頁
- 第三十五号 華山の田原行(十八)…柴田雅芳 十三頁
- 第三十六号 藩主諫言の困難さ…別所興一 四頁
- 第三十七号 華山の田原行(十九)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十八号 藩主に在国をすすめる諫状…別所興一 二頁
- 第三十九号 『四州真景の旅』①旅の同行者…中神昌秀 八頁
- 第三十号 平成二十七年華山・史学研究会研修視察
鎌倉・藤沢の渡辺華山ゆかりの地…鈴木利昌 十二頁
- 第三十一号 華山の田原行(二十)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十二号 華山の田原行(二十一)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十三号 華山の田原行(二十二)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十四号 華山の田原行(二十三)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十五号 華山の田原行(二十四)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十六号 華山の田原行(二十五)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十七号 華山の田原行(二十六)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十八号 華山の田原行(二十七)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十九号 華山の田原行(二十八)…柴田雅芳 十四頁
- 第四十号 華山の田原行(二十九)…柴田雅芳 十四頁

◆田原市博物館からのご案内◆

- 第三十八号 華山の田原行(二十一)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十九号 金子武四郎への依頼状と彼の人物像の紹介…別所興一 二頁
- 第四十号 『四州真景の旅』②帰路の旅…中神昌秀 八頁
- 第三十号 平成二十八年華山・史学研究会研修視察
毛武と渡辺華山と熊谷…鈴木利昌 十二頁
- 第三十一号 華山の田原行(二十二)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十二号 『四州真景の旅』③旅先で訪ねた人物
大里庄治郎…中神昌秀 六頁
- 第三十三号 華山の田原行(二十三)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十四号 父定通の辞世と霊前に届いた弔詩の紹介…別所興一 二頁
- 第三十五号 平成二十九年華山・史学研究会研修視察
鷹見泉石のふるさと…古河市…鈴木利昌 十二頁
- 第三十六号 華山の田原行(二十四)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十七号 華山の田原行(二十五)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十八号 華山の田原行(二十六)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十九号 華山の田原行(二十七)…柴田雅芳 十四頁
- 第四十号 華山の田原行(二十八)…柴田雅芳 十四頁
- 第三十四号 田原市博物館企画展のご案内「帰ってきた
国指定重要文化財 渡辺華山筆千山万水図
」初公開 奈良岩雄氏寄贈資料」 十五頁
- 第三十五号 秋の企画展「写楽と豊国」役者絵と美人画
の流れ」 十五頁
- 第三十六号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十七号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十八号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十九号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第四十号 公益財団法人華山会・博物館からのご案内 十六頁
- 第三十号 華山会報は六月と十二月に発行されます。
華山会報のバックナンバーをご希望の方は、華山会館、
田原市博物館にお申し出ください。
田原市博物館ホームページ
(<http://www.taharamuseum.gr.jp>) からご覧いただけます。
- 第三十一号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十二号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十三号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十四号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十五号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十六号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十七号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十八号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第三十九号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁
- 第四十号 公益財団法人華山会・博物館・渥美郷土資
料館からのご案内 十六頁

公益財団法人華山会
田原市博物館
田原市渥美郷土資料館
からご案内

博物館企画展のご案内

開催中～十二月九日(日)

企画展 田原の美術 平井誠一展

～色彩思考の変遷～ (企画展示室)

同時開催：谷文晁・渡辺華山の山水画

(特別展示室)

平常展のご案内

十二月十五日(土)～平成三十一年二月三日(日)

明治一五〇年椿椿山の弟子～野口幽

谷・渡辺小華を中心に(特別展示室)

明治一五〇年宮川春汀の錦絵 (企画

展示室二)

二月九日(土)～三月二十四日(日)

描かれた女性と子ども(特別展示室)

ひな人形と初風展(企画展示室)
期間中スタンプリーを開催します

渥美郷土資料館企画展のご案内

開催中～十二月九日(日)

企画展 田原の美術 平井誠一展

～色彩思考の変遷～ (企画展示室)

二月一日(金)～三月十七日(日)

企画展 第33回ひな祭り展(企画展

示室)

江戸時代から現代までのひな人形の変遷を展示。

イベント 着物を着ておひなさま気分になろう 三月三日(日)予定

県内の博物館・資料館をめぐるひな祭りスタンプリーを開催します

【賞品有り】

観覧料

企画展 一般 四〇〇円(三二〇円)
企画展開催時は小・中学生無料
平常時

一般 二二〇円(一六〇円)
小・中学生 一〇〇円(八〇円)
()内は二十人以上の団体料金
渥美郷土資料館は無料

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日、十二月二十八日～一月四日

(公財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館・シエルマ吉胡への無料入館
展覧会・催し物のお知らせ
見学会に参加できます。
博物館日より(年数回)・華山会報をお送りします。

華山会報 第四十一号

平成三十年十二月一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 林 勇夫

事務局長 小川金一

〒四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江二二の一

TEL〇五三一・二二・一七〇〇

FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 小林一弘

吉川利明

石川洋一

林 哲志

中村正子

柴田雅芳

池戸清子

服部穰治

山田哲夫

加藤克己

別所興一

藤城精一

中神昌秀

大崎 洋

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 平成三十一年六月一日